

日本文学研究会

平成三十一年二月二十日

『讃岐典侍日記』の和歌をめぐる

専任講師 丹下 暖子

『讃岐典侍日記』には二十三首の和歌が見られるが、そのすべてが堀河天皇の「追慕の記」である下巻に配されている。本発表では、二十三首の和歌のうち、古歌の引用に注目し、役割や位置づけを論じた。また、讃岐典侍の詠歌の特徴にも言及した。

『讃岐典侍日記』には、勅撰集や『栄花物語』に入集する古歌を一首そのまま引用するという場面が見られる。自身の心境に一致する歌を引用し、「げに」と思いを深める形で展開する。これらを検討すると、諒闇の間の記事には天皇追慕の哀傷歌を引用する一方、諒闇が明けた後の記事には天皇以外の人物に対する哀傷歌を引用していることに気づく。堀河天皇にまつわる回想記事も、諒闇の前後で公的なものから私的なものへと変容していることから、讃岐典侍は諒闇の前後で記述姿勢を変化させていたと考えられる。そして、特に諒闇の期間においては天皇追慕の先例となる哀傷歌を引用し、ともに仕えた人々と共有される堀河天皇の姿を回想する下巻には、典侍としての視点で天皇の御代を振り返り、追慕しようとする一面もあったと捉えられる。

「ドヤ街」から読む「あしたのジョー」——梶原一騎・ちばてつや・三島由紀夫

専任講師 山田 夏樹

本発表では、高森朝雄（梶原一騎）原作、ちばてつや作画「あしたのジョー」（週刊少年マガジン）一九六八・一・一（七三・五・二三）に描かれる「ドヤ街」を焦点化する。少年院出身で「ドヤ街」に住むジョーの生き方には、これまで学生運動など同時代の反体制の姿勢が重ねられ読解されてきたが、実際には本作は、限定された時代には留まらない、現在にも射程の及ぶ視点を内包している。反体制のみへの注目、逆説的に、戦後日本を一枚岩のもののように単純化することには他ならない。しかし「ドヤ街」に住むジョーは、反体制のみならず、引き揚げ、戦災孤児など様々な性質を体现する存在である。そこで戦後七〇年余を経ても収束することのない、対外戦争に密接に関わる過去と対峙していくことによって、ジョーは自身のみならず周囲の人びとの囚われたあり方をも解き放っていく。そうした点に注目することで、同時代的な反体制の枠組みにノスタルジックに留まること、現在と無縁の事象として忘却することは異なり、本作が内包する批評性を改めて顕在化させていく。